The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	オ型謙譲語の用法の歴史 ： 受益者を高める用法をめぐって
Author(s)	森, 勇太
Citation	語文. 2012, 98, p. 40-50
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69195
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

オ型謙譲語の用法の歴史
――受益者を高める用法をめぐって――

森　勇太

一　はじめに

現代語の謙譲語形式「お―する」は、接続する動詞の補語に高めるべき人物（以下、上位者とする）をとる際に用いられる。菊地（一九九四）も「お―する」（謙譲語A）[1]は、「補語を高める（同、二五六）」と述べる。

（1）今から私が先生にお会いしてきます。［上位者（先生）＝補語（ニ格）］

しかし、現代語の謙譲語「お―する」は接続する動詞の補語に人物が想定できないときも用いられる。

（2）a［先生が両手で荷物を持っていてドアの前に立っていたので］研究室のドアをお開けした。

b＊先生に開ける。

（3）a［先生に東京に一二時に着くには何時の新幹線に乗ればよいか尋ねられた。］少しお待ちください。今からお調べします。

b＊先生に調べる。

（2）「開ける」（3）「調べる」は（2b）・（3b）で示すように動詞の補語に上位者が想定できない。先行研究において、このような表現は「～のために」にあたる人物（受益者）を高める表現とされる（蒲谷一九九二、菊地一九九四等）。しかし、「～のために」は動作の種類に関わらずどのような文でも用いられる要素と考えられるから、この現象は「動詞の補語」という規定がどのレベルの補語までを含むのか曖昧であることを示唆している。

本稿では、「お―する」及び、そのもととなった形式（「お―申す」等、小松一九六七）を一括して「オ型謙譲語」とし、その歴史的変化を考察する。具体的には、（2）・（3）のように補語に上位者をとらない動詞で「お―する」を用いることができるのは、近世後期以降であることを示し、その用法の拡張には、利益の表し方に関する語用論的制約が影響していることを述べる。

本稿の構成を以下に述べる。まず、二節では現代語のオ型謙譲語の機能について述べる。三節ではオ型謙譲語の歴史を調査し、「受益者を高める」用法が近世後期以降に成立していることを主張する。四節では三節で見られた変化の要因について述べる。最後の五節はまとめである。

二　オ型謙譲語の定義と用法

二・一　オ型謙譲語の定義

本稿ではオ型謙譲語を（4）のように定義する。

（4）オ型謙譲語―接頭辞「お」＋主要語（動詞・動名詞）＋下接語「申す（等）」

主要語は、接頭辞オと下接語の間に位置して述部の基本的意味（菊地一九九四）を担う動詞連用形や動名詞（影山一九九三）と定義しておく。

「会う」を例としてオ型謙譲語の形式を挙げると、「お会い申す」「お会い申し上げる」「お会い致す」「お会いする」などが該当する。

二・二　オ型謙譲語の「受益者を高める用法」

まず、議論の前提として、現代語のオ型謙譲語がどのような環境で用いることができるのか、整理しておく。謙譲語は基本的に、主要語の補語にとる人物を高める表現であると考えられる。

（5）a　先生に会う。
　　b　先生にお会いする。

（6）a　私は八時の特急に乗車します。
　　b＊私は八時の特急にご乗車します。

（菊地一九九四、二七六）

（5）では、主要語「会う」のニ格に人物がとれるため、オ型謙譲語は「先生」を高める表現として成立するが、（6）では、「乗車」は補語に人物をとれる動名詞ではないため、「ご乗車する」という表現が容認されない。

次に、オ型謙譲語が高める補語の範囲を整理しておく。菊地（一九九四）の記述により、現代語のオ型謙譲語の様相も確認しておく。菊地（一九九四）は「お―する」において上位者をとる主要語の格（補語）を以下のように示す（挙例は筆者により一部省略した）。

（7）a　ニ格―お会いする、お祈りする、お売りする、お送りする、お教えする、お返しする、等。
　　b　ヲ格―お諫めする、お祝いする、お送りする、お起こしする、お探しする、等。
　　c　ト格―お別れする、ご一緒する、ご契約する、等。
　　d　カラ格―お預かりする、おいとまする、お受けする、等。
　　e　ニツイテ―お噂する、お聞きする。
　　f　タメニ［「……のために」を高める］―お開けする、お祈りする、お書きする、お探しする、お調べする、お出しする（取り出す／郵便を出す）、お作りする、お取り

する（物を／食事を）、お取り寄せする、お直しする、お払いする、お引き受けする、お持ちする、お読みする、ご用意する　（以上、菊地一九九四、二八三―二八六）

この中で、注目されるのは、（7f）の「～タメニ」を高める用法である。他の用法が高めているのは主要語の必須補語（寺村一九八二、八二）であり、主要語の補語に必ず人物がとれるが、（7f）の主要語にはそもそも補語に人物がとれない、あるいは、とれたとしても必須補語ではない。

（8）a＊先生に調べる。

b　少しお待ちください。今から（先生のために）お調べします。　（（3）再掲）

（9）a　先生にお菓子を作った。

b　先生にお菓子をお作りした。

（8）「調べる」はそもそもニ格や他の補語に人物をとりにくいように思われるが、オ型謙譲語で用いることは許容される。また、（9）「作る」はニ格に人物をとるが、そもそも「作る」という動作は特定の相手が必要なものではなく、寺村（一九八二、一〇〇）によれば必須補語は動作主（ガ格）と作品（ヲ格）である。つまり「作る」のニ格は副次補語であり、受益者を標示するための任意の要素と捉えられる。このような主要語では、受益者「（先生）のために」を読みこめるため、その使用が可能になると解釈できる。受益者は副次補語ではあるが、オ型謙譲語の容認度に影響を与える点で他の副次補語とは異なるものである。

本稿では、（7f）のように人物を必須補語に取らない主要語で用いられるオ型謙譲語の用法を、オ型謙譲語の「受益者を高める用法」と呼ぶことにする。

三　オ型謙譲語の用法の歴史

三・一　調査の概要

本節では、オ型謙譲語の用法の歴史について、特に受益者を高める用法に着目して述べる。接頭辞「お」を冠した敬語は、一五世紀後半頃には用言に接続する例が見られる。[2] 調査にはオ型謙譲語のまとまった用例が見られる中世末期（一六〇〇年頃）以降の以下の資料を対象とした。

中世末期―『天草版平家物語』、『エソポのファブラス』、『大蔵虎明本狂言』

近世前期―近松世話物浄瑠璃（『日本古典文学大系』四九所収作品）、『噺本大系』一―八巻（慶長-明和年間）

近世後期―『東海道中膝栗毛』、『浮世風呂』、『春色梅児誉美』、『春色辰巳園』、その他黄表紙・洒落本作品（『日本古典文学大系』五九所収作品、『洒落本大成』所収の上方作品）[3]

明治期―『明治の文豪』

大正期―『新潮文庫の一〇〇冊』（作者生年一八七〇―一九〇〇年代）

三・二　概観

前節の資料からオ型謙譲語の用例を取り出し、それぞれの主要語で人物を取りうる補語［例「会う」…ニ格（太郎に会う）、「誘う」…ヲ格（太郎を誘う）］がどの格かを調査した。それぞれの用例を、主要語の上位者があてはまる格ごとに分類して表1に示した。

表1　オ型謙譲語の用例数と上位者をとる格

時代区分	合計	補語				受益者を高める
		ニ	ヲ	ト	カラ	
中世末期	57 （5）	54 （4）	3 （1）	0 （0）	0 （0）	0 （0）
近世前期	120 （34）	81 （25）	22 （6）	1 （1）	16 （2）	0 （0）
近世後期	271 （72）	201 （41）	60 （26）	4 （3）	5 （1）	1 （1）
明治期	343 （96）	212 （53）	112 （36）	14 （3）	2 （2）	3 （2）
大正期	327 （82）	222 （44）	83 （31）	17 （3）	2 （1）	3 （3）

［上…延べ語数、下（カッコ内）…異なり語数］

三・三　各時代の状況

三・三・一　中世末期

中世末期の文献でオ型謙譲語の例は、すべて主要語の必須補語に上位者をとる際に用いられている。

(10) a　〔太郎冠者→売手〕「近比かたじけなひ、今度のほりたらは、かならずお尋申さう」［上位者…ニ格］

（虎明本狂言、末広がり、上、七二）

b　〔孫→祖父〕久しう御見廻申さぬ程にとぞんじて参て御ざる【久しくご機嫌うかがいをしていなかったので】［上位者…ヲ格］

（虎明本狂言、枕物狂、中、二三五）

(11) にオ型謙譲語の主要語の例をすべて挙げる。

(11)　［中世末期］

a　ニ格―尋ねる、供、礼、詫び言

b　ヲ格―見舞う（あいさつ）

ただし、中世末期のオ型謙譲語は現代語と同様に生産的な形式とは言えない。オ型謙譲語は「供」以外の主要語はすべて、発話を伴う動作であり、下接語はすべて「申す」である。「供」だけは唯一の例外であって、下接語は「申す」と「いたす」の両方が用いられる。

(12) a　［鞍馬へ行こうと誘われて］〔男二→男一〕［…］早々御出かたじけない、おっつけおとも申さう」

（虎明本狂言、連歌毘沙門、上、三一）

b　〔奥筑紫→丹波〕「よいつれじや程に、都までおともいたさう」

（虎明本狂言、筑紫の奥、上、六二）

これについて、そもそも「御供」は一三世紀において「お―する」のように見える例や下接語として謙譲語を伴っているように

見える用法がある［↓（13）］。このことは国田（一九七七）が、接頭辞「お」が動詞に接続する初期の例として挙げる『御湯殿上日記』（一五世紀後期〜）よりもかなり遡るものである。

（13）a　［道長が］白き犬を愛してなん飼はせ給ひければ、いつも御身を離れず御供しけり。
（宇治拾遺、巻一四―一〇、四五〇）

b　且は十善帝王、三種の神器を帯してわたらせ給へば、いかならん野の末、山の奥までも、行幸の御供仕らんとは思はずや　（平家、巻七、福原落、下、一一五）

山田（一九五四［二］）は、『平家物語』における敬語接頭辞「お」の用法を分類する中で、尊敬語の用法（「御仏」「御身」等）を挙げるとともに、「お」を冠して謙譲語を形成する例が見られないことを指摘する。一見謙譲語のように見える「御供」「御送り」「御奉公」等の例も「尊敬すべき人に対しての動作作業をあらはす名詞に「御」を冠するもの」であり、「皆自己の行動が対者に付随したるものなることをあらはすものなれば、根柢に於いては他の例と一般なるものなるを見るべし（山田一九五四［二］、一五九）」と、尊敬語として捉えるべきであると述べる。筆者もこれに従い、「お供申す」「お供致す」は尊敬語として、オ型謙譲語の成立以前から用いられていた形式であったと考える。

しかし、（11）に挙げた「御供」以外の主要語の例において、一四世紀以前の用例は見られない。これらの例では、下接語がすべて「申す」であり、主要語が言語行為を伴う。このことからは、「申す」が謙譲語を生産的に作る形式として文法化されきっておらず、「言う」の意味を残していることが窺える。[4]

また、すべての主要語が意志的な動作と捉えられる。このことは、「申す」（言う）という動作が意志的に行う動作であり、オ型謙譲語が「上位者に直接的に関わる意志的な動作（言語行為）」に対して適用する形式として形成されたことを示している。

三・三・二　近世前期

近世前期の文献でオ型謙譲語の例を確認すると、以下のような表現が見られる。近世前期の例はすべて主要語の必須補語に上位者をとる際に用いられている。

（14）a　御無心ながらま一度お尋ね申したい［上位者…ニ格］【もう一度お尋ねしたい】
（近松浄瑠璃、心中天の網島、上、三八〇）

b　毎晩毎晩寝込にお見廻申せども。一度も本望遂げさせぬ。［上位者…ヲ格］【お見舞いするけれども】
（近松浄瑠璃、大経師昔暦、上、二二二）

ただし、近世前期では、「申す」の主要語が言語行為を伴わないと考えられるものも含まれる。

（15）a　其儀にて御さあらは、子にて候者をも御目見え申させたきとて、［上位者…ニ格］
（きのふはけふの物語、上、二四、①、三八一）

b　いや、わたくしハお見しり申ませぬ。［上位者…ヲ格］

（軽口蓬莱山、巻四、⑦、二七一）

このことから、主要語の範囲は中世末期よりも拡張しているといえる。

三・三・三　近世後期

近世後期においてもほとんどの例は主要語の必須補語に上位者をとる表現である。

(16) a　〔鬼→米八〕「利［利子］は初手におもらひ申しましたから、七両では一歩お返し申します」［ともに上位者…ニ格］【一歩お返しします】

（春色辰巳園、四編、巻一一、四一七）

b　〔下女→福助〕「まづ爰は斯しておいて、おとつさん所へおつれ申ませう」［上位者…ヲ格］【お父さんのところへお連れしましょう】

（浮世風呂、四編下、二九四）

ただし、近世後期では、補語に人物をとらない主要語がオ型謙譲語として用いられる例があり、受益者を高める用法として解釈可能である。(17) では動詞「まける」は「人物＋ニ」という格をとらないように思われる（「＊太郎にまける」）がオ型謙譲語が用いられている。

(17)　〔侍→北八〕「それは高直じや」〔北八→侍〕「すこしはおまけ申ませう」【少しはおまけしましょう】

（東海道中膝栗毛、二編上、一〇三）

三・三・四　明治期・大正期

明治期・大正期も、ほとんどの例は主要語の必須補語に上位者をとりうる。

(18) a「御免なさい。でも、どうしても一度お会いして、御相談しなければならないのです。私の一身上のことです。」［上位者…ニ格］

（青春の蹉跌、六）

b「河野でも承り及んで、英吉君の母なども大きにお案じ申して居ります。」［上位者…ヲ格］

（女系図、五五）

ただし、(17) と同様に、補語に人物を想定しにくい主要語で、オ型謙譲語が用いられる例もある。

(19) a　〔道子→理学士〕「まあ、辛うござんすよ、これじゃ、」と銅壷の湯を注して、杓文字で一つ軽く圧えて、〔道子→理学士〕「お装け申しましょう、」と艶麗に云う。［?あなたにごはんをつける］

（女系図、三〇）

b　〔主人→女中〕これ、早う［お客の］御味噌汁をお易へ申して来ないか」［＊客に味噌汁を替える］

（金色夜叉、第二章）

c　〔門附→女房〕「早速一合、酒は良いのを」／〔女房→門附〕「ええ、もう飛切りのをおつけ申しますよ」［＊あなたに酒をつける（温める）］

（歌行燈、三）

このことから、オ型謙譲語の受益者を高める用法は近代に入っても見られ、定着しているといえる。

三・四　まとめ―オ型謙譲語の歴史的変化

本節で述べた歴史的変化を振り返ると、オ型謙譲語は中世において、「言語行為を伴う動作の相手」を高める形式であったが、近世以降は言語行為に限らず、「意志的な動作の対象・相手（ほか）」を高める表現として用いられた。さらに、近代以降、必須補語に上位者をとれない主要語でも、受益者を高める用法［→(17)・(19)］が一般化しており、通時的にオ型謙譲語の用法が拡張したといえる。

四　歴史的変化の要因

四・一　申し出表現の歴史的変遷

筆者はオ型謙譲語に受益者を高める新用法が形成されたのは、利益の表し方に関する語用論的な制約が変化したためと考える。

森（二〇一一）では、話し手が聞き手の利益になる行為を行うことを申し出る表現（以下、申し出表現）の歴史について、調査を行った。現代語では、与益表現謙譲語（「てあげる」「てさしあげる」「てしんずる」等）を用いて上位者に申し出を行うことは丁寧ではない。

(20)　［学生から先生への発話］

a　先生、コーヒーを〔#入れてあげます／#入れてさしあげます／お入れします〕。

b　先生、かばんを〔#持ってあげましょうか／#持ってさしあげましょうか／お持ちしましょうか〕。

この与益表現による申し出表現の歴史を調査したところ、近世以前は、与益表現謙譲語（「てあげる」「てさしあげる」「てしんずる」等）を用いた申し出表現は上位者に用いられた例が一定数ある［→表2］。与益表現による申し出が上位者にも用いうる丁寧な表現であったと考えられる。

表2　与益表現による申し出表現（森 2011、20）

時代	申し出表現	
	全数	対上位者
中世末期～近世前期	72	37　(51.39%)
近世後期	49	24　(48.98%)
明治期	116	11　(9.48%)
大正・昭和期	97	8　(8.25%)
昭和期	133	15　(11.28%)

(21)　a　［雷は中風ぎみであると診断された］〔雷→医師〕「今までさやうの事はしらなんだ、いそひでなをせ」〔医師→雷〕「私は第一針が上手でござる、たてなをひてしんぜう」【針を立てて（病気を治して）あげましょう。】

（虎明本狂言、雷、中、一五）

b　〔女房→やす〕「ヲヲ、長ばなしで骸が乾くのも忘れた」〔やす→女房〕「私が［お湯を］汲で上ませう」

（浮世風呂、二編下、一五六）

しかし、明治期以降、与益表現による申し出表現は上位者に用いられる割合が減少し、与益表現の待遇価値が下がったと考えられる。つまり、近代以降、「聞き手に対する利益を示してはいけない」という語用論的制約が成立し、与益表現が上位者に用いることができなくなった。

このため、近代に入って与益表現で上位者に対する配慮を示すことは難しくなる。しかし、依然として上位者に対して敬語使用によって配慮を示そうとする動機は存在する。このことから、これらの動機をともに満たすものとして、オ型謙譲語に受益者を高める用法が生まれたと考えられる。[5]

四・二　オ型謙譲語の文法化

四・二・一　オ型謙譲語の語彙的資源

三節で見た、オ型謙譲語の歴史的変化は、「言う」の意味を持つ「申す」を語彙的資源とした文法化の過程とも解釈できる。

オ型謙譲語の拡張の様相を振り返っておくと、オ型謙譲語は中世期に「言う」の謙譲語形「申す」を語彙的資源として機能語となった。「言う」の原義から「相手に直接的に関わる意志的な動作」に付与されてきたと考えられる。また、近世後期以降に受益者を高める新用法が生まれたが、上位者に利益を与える動作も意志的な動作であることには変わりなく、その点で用法を逸脱するものではなかった。

四・二・二　補助動詞型謙譲語との対照

このオ型謙譲語の「主要語に意志的な動作を表すものを取る」性質は、中古語から見られる謙譲語の補助動詞とは異なる。オ型謙譲語以前には、動詞に「奉る」「参らす」等の補助動詞を接続する謙譲語形式（以下、補助動詞型謙譲語）がとられていた。中世後期以降に見られるオ型謙譲語は、その構成上で謙譲語の補助動詞が利用されてはいるものの、語幹部分をオ型にしている点でそれまでとは全く異なる形態上の特徴を持つといえる。

また用法の面でも、現代語のオ型謙譲語では動作の意志性が非常に重要であるのに対し、中古語の謙譲語は意志性のない動詞に接続したときにも用いられている。中古語の補助動詞型謙譲語は、上位者が含まれる集合操作、受身、非意志的な状態変化の述語［→(22)］など上位者に関わることであれば、広く用いることができる（森山一九九〇、二〇〇三）。以下、口語訳は『新編日本古典文学全集』の該当部分の訳を挙げている。

(22) a　中宮、右大ゐ殿よりはじめたてまつりて、【中宮様や右大臣様を御はじめといたしまして】［集合操作］
（落窪、巻三、一二九）

b　(帯刀→あこぎ)「［姫君からの手紙を蔵人の少将に］［…］かうして取られたてまつりぬ。【こうして＊お取られしてしまいました】［受身］
（落窪、巻一、六三）

c　(薫→弁)「いはけなかりしほどに、故院におくれたてまつりて、【幼少の時に故院に先立たれ申して】［非意志的動

作」　（源氏、椎本、⑤一九九）

補助動詞型謙譲語のこれらの用法は近世にも見られ、文語文のスタイルではあるものの、その性質は引き継がれている。

一方現代語のオ型謙譲語では、これらはいずれも表現しづらい。

(23) a＊山田先生をおはじめとして、鈴木先生、佐藤先生などお世話になった先生が多く出席してくださった。［集合操作］

b＊先生にお先立たれして、とても辛い。［受身］[6]

c＊先生の荷物をおなくしして、先生に謝った。［非意志的動作］

オ型謙譲語はこのような意志性のないときの用法は引き継がず、オ型謙譲語独自で用法を拡張させていったと考えられる。

五　まとめ

本稿では、以下のことを述べた。

(24) a　現代語のオ型謙譲語には、必須補語を高める用法とともに、副次補語の受益者を高める用法がある。［二節］

b　オ型謙譲語は「申す」を語彙的資源とし、中世末期においては言語行為の相手を高める用法で用いられた。その後近世では言語行為に限らず意志的な動作の必須補語を高める用法で用いられるようになり、さらに近世後期以降、受益者を高める用法が見られるようになる。［三節］

c　オ型謙譲語に受益者を高める用法が成立した要因は、利益の表し方に関する語用論的制約の変化のためである。近代以降与益表現を用いて上位者に対する利益があることを示すことは丁寧な運用ではなくなっている。それにより、上位者が受益者であるときは、利益について指定しないオ型謙譲語の用法が拡張して用いられるようになった。［四節］

近代以降「てくれる」「てくる」の間接受影用法（山田二〇〇四、森二〇一〇）等、受益者（被影響者）を標示する文法形式が成立しており、受益者の標示は古代語から近代語への大きな変化と考えられる。本稿で述べたオ型謙譲語の変化もその潮流の一つの表れと位置づけられる。

注

(1)　本稿で扱う「謙譲語」は素材敬語として用いられる「謙譲語A（菊地一九九四）」に限定している。「参る」「申す」など対者敬語の機能を持つ「謙譲語B」については、本稿では取り上げない。

(2)　「お」は中古においては名詞に接続する用法が基本的な用法であったが、中世に入ると下接語の範囲が拡大する。国田（一九七七）は『御湯殿上日記』に動詞に接続する例があることを示している。

［i］［文明一六（一四八四）年七月一八日］御てうし御もたせらる。　（国田一九七七、一二）

(3)　矢野（一九七六）等に従い、上方語が反映されているとされる資料を用いた。使用した資料は以下の通り。『穿当珍話』『聖遊郭』『月花余情』『陽台遺編』『妣閣秘言』『新月花余情』『郭中奇

譚（異本）』『風流裸人形』『見脈医術虚辞先生穴賢』『短華蕊葉』『北華通情』『眸のすじ書』『十界和尚話』『三眸一致うかれ草紙』『南遊記』『当世嘘の川』『滑稽粋言竊潜妻』『当世粋の曙』『河東方言箱枕』『北川蜆殻』

（4）西岡（二〇一一）によれば、南琉球八重山・竹富島方言には、「申し上げる」を原義とする謙譲語A形式「ッシャルリン」があるが、それらは前接語に「発言的内容を含むという文脈のもとで初めて使用可となる（同、六〇）」という。このことからは中世末期のオ型謙譲語「お―申す」と通じる運用がなされていた可能性が示唆される。

（5）ただし、主要語の補語に上位者が想定できないときのオ型謙譲語の例は近世後期から見られるが、申し出表現における与益表現の待遇価値が下がっているのは明治期に入ってからである。変化の時期が一致しない点は問題であるが、（17）の『東海道中膝栗毛』は町人から侍への例であり、特に丁寧さの求められる場面と考えられる。このような場面では「聞き手への利益を示してはいけない」という語用論的制約が先行して適用されていた可能性がある。これについては他の文献も含めて今後さらに調査を進めたい。

（6）ただし、その承接が全くないわけではない。近年でも三島由紀夫『宴のあと』には以下の例が見られる。

［ii］それから、この間あなたにお頼まれした労組の宴会ね［…］

（宴のあと、森山一九八九、五）

資料

※読みやすさのため、本文を改めたところがある。また、調査には一部、『日本古典文学大系』本文データベース（国文学研究資料館）を使用した。

『落窪物語』（『新日本古典文学大系』岩波書店）、『源氏物語』『宇治拾遺物語』『東海道中膝栗毛』（以上『新編日本古典文学全集』、小学館）、『大蔵虎明本狂言』（表現社）、『平家物語』『近松浄瑠璃』『浮世風呂』『春色辰巳園』（以上『日本古典文学大系』、岩波書店）、噺本（『噺本大系』、東京堂出版）、『明治の文豪』『新潮文庫の一〇〇冊』（新潮社）

参考文献

影山太郎（一九九三）『文法と語形成』ひつじ書房

蒲谷宏（一九九二）「「お・ご～する」に関する一考察」辻村敏樹教授古稀記念論文集刊行会（編）『辻村敏樹教授古稀記念 日本語史の諸問題』一四一―一五七頁、明治書院

菊地康人（一九九四）『敬語』角川書店（一九九七年再刊、講談社学術文庫）

国田百合子（一九七七）『女房詞の研究』風間書房

小松寿雄（一九六七）「「お―する」の成立」『国語と国文学』四四―四、九三―一〇二、東京大学国語国文学会

辻村敏樹（一九六八）『敬語の史的研究』東京堂出版

寺村秀夫（一九八二）『日本語のシンタクスと意味 第Ⅰ巻』くろしお出版

西岡敏（二〇一一）「竹富方言の敬語補助動詞と対者敬語的な終助詞」『日本語の研究』七―四、五五―六七頁、日本語学会

森勇太（二〇一〇）「移動を表さない「-てくる」の成立―受益表現「-てくれる」との関連から―」『待兼山論叢 文学篇』四四、一―一六頁、大阪大学文学会

――（二〇一一）「申し出表現の歴史的変遷―謙譲語と与益表現の相互関係の観点から―」『日本語の研究』七―二、一七―三一頁、日本語学会

森山由紀子（一九八九）「謙譲語成立の条件―「謙譲」の意味をさぐる試みとして」『研究年報』三三、一―二〇頁、奈良女子大学文学部
――（一九九〇）「「落窪物語」の謙譲表現と現代語の謙譲表現「謙譲」をめぐる史的考察の端緒として」『叙説』一七、一四―三八頁、奈良女子大学国語国文学研究室
――（二〇〇三）「謙譲語から見た敬語史、丁寧語から見た敬語史―「尊者定位」から「自己定位」へ―」菊地康人（編）『朝倉日本語講座八 敬語』第十章、二〇〇―二二四頁、朝倉書店
矢野準（一九七六）「近世後期上方語資料としての上方板洒落本類」『語文研究』四一、二二―三二頁、九州大学
山田敏弘（二〇〇四）『日本語のベネファクティブ―「てやる」「てくれる」「てもらう」の文法―』明治書院
山田孝雄（一九五四［二］）『平家物語の語法』東京宝文館

付記　本稿は土曜ことばの会（二〇一一年四月三〇日）および第二四〇回筑紫日本語研究会（二〇一二年二月一八日）における口頭発表を基にしたものである。発表に際して、多くの方々にご教示をいただいた。ここに記して感謝申し上げます。なお、本稿は平成二二・二三年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）「日本語授受・受益表現の歴史的変化に関する研究」（課題番号二二・三三九八）による研究成果の一部である。

（もり・ゆうた　関西大学・日本学術振興会特別研究員）